

## 2016 年度学術交流支援資金外国語電子教材作成支援 報告書

【研究課題名】 3-14 認知科学(07)/構成的認知論(14)

【申請者】 環境情報学部教授 諏訪正樹

### 【研究背景】

現在人間の知の探究において、触覚的な経験や事象が注目を浴び始めている。その理由は、知の様態を彩る重要概念として「身体性」や「状況依存性」があるが、触覚的な経験がその基礎になるからではないかという仮説が立つからである。しかし、触覚的体験は内的な表象であり、なかなかデータとして補足できない。そういった主観的な世界を明らかにするための研究の方法論はどうあるべきかという問いが、これからの認知科学研究に求められる。

### 【目的】

本年度の研究は、街歩きにおける触覚的な体験を取り上げた。「触覚的」が意味するのは広義であり、実際に手のひらや皮膚で触ることよりも、むしろ、街全体の空気感や雰囲気といった、(物理的には触らないが)視覚/聴覚/嗅覚/触覚/行為などを通じて心の中に生まれる体感のエピソードを補足することを試みた。

見知らぬ土地を探索的に歩いていると、「なんだか、このあたりの雰囲気が気になる」「違和感がある」「なんだか心がざわっとする」みたいな心持ちになることは、しばしばある。そういった時に発せられる特徴的な言葉はあるのか？ 実際に筆者が共同研究者とともに会話しながら散歩(140分)したケーススタディを緻密に分析した結果、そういった心持ちを表現する特徴的な言葉の種類についての仮説を立て、その頻度分析を行い、知見を得た。

### 【成果】

(1) (広義の意味での)触覚的の心持ちを表現する言葉群に関する仮説

我々のケーススタディから抽出した言葉群は

- こそあど言葉(但し、「の」「で」「へ」などの助詞を伴った後に明確な対象物を示す名詞が続く場合は除く)
- 「すごい」「面白い」などの、何かを強く評価する言葉
- 「なんか」「何というか」「やっぱり」などの言葉
- 「ワオ～」「え?」「あ!」などの感嘆詞

である。街に散在する、何か新しいものごとに着眼したり、着眼したものごとに自分たちならではの解釈を与えたりした時に、特に、明確に分析や評価はできていないけれども違和感や疑問のレベルでとりあえず言葉としてエモーションを表出した時には、そういった類の言葉が出現するのではないかというのが、我々の仮説である。

(2) ケーススタディとして散歩した街

田園都市線の K 駅から、自由気ままに進みたい方向を臨機応変に決めながら、3名の研

究者であーだこーだしゃべりながら、140分の散策をした。日付は2016年3月9日である。K 駅は多摩川の西側の多摩丘陵が始まる地域に位置しており、山、谷、その間の急峻な坂道、谷戸地形が入り組んで登場する。全部で5つの台地、2つの谷(川筋)、2つの谷戸地形を次々に体験しながら歩くことになり、最終地点は(K 駅の隣の)M 駅になった。

歩いた経路を地図上にプロットした図を示す(図1)。

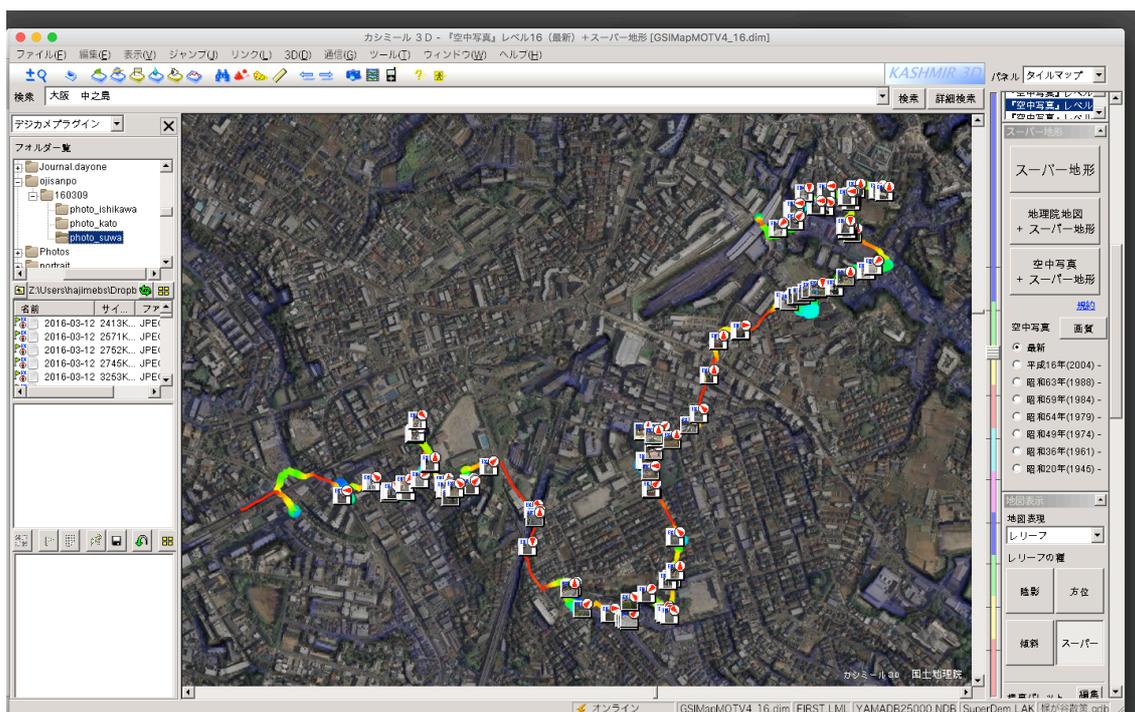


図1: 散歩の経路

### (3) 触覚的気持ちを表現する言葉の頻度

140分の街歩きにおいて、上記(1)の言葉の頻度を1分ごとに集計し、2分の幅で移動平均をとった結果をグラフに示す(図2)。

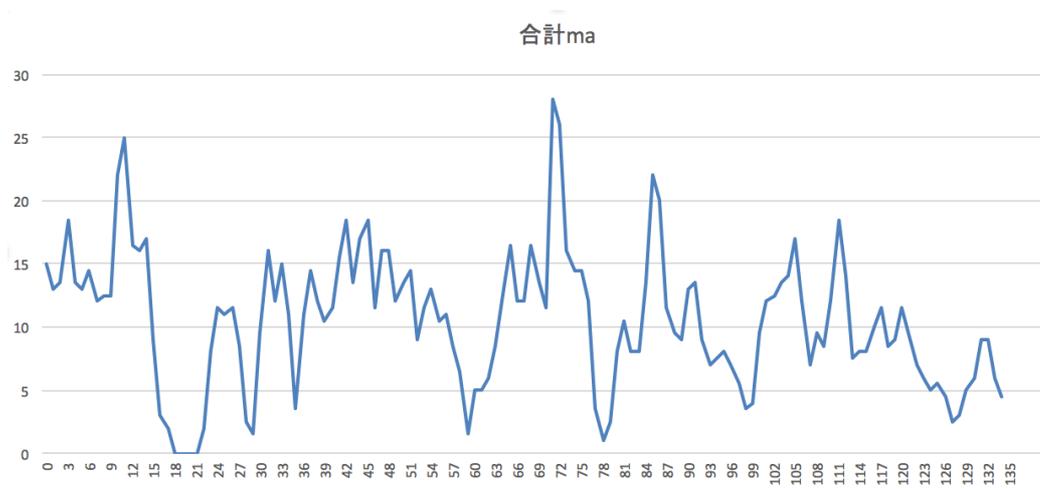


図2：触覚的気持ちの言葉の増減

触覚的気持ちを表すことばは、このようにならかなり増減を繰り返すことが判明したのは面白い。どのような状況でこの種の言葉が頻出するか(触覚的体験が活性化するのはどういった状況の時か)を分析することにする

#### (4) 触覚的体験が活性になる状況についての考察

図2のグラフがピークを迎える分数を列挙すると以下のようになる。

- 歩き始めてから3分:谷 (No.1 谷)に下りている最中
- 11分:棍が谷の台地 (No.1 台地)と見合う位置関係にある向こう側の台地 (No.2 台地)に登り始めたところ
- 24～6分:No.2 台地から No.1 谷に向けて下っている最中
- 31～3分:No.1 谷から再び台 (No.3 台地-No.1 台地と尾根続き)に向けて登り始めている(谷に面白い土管を見つけ、そこで左折して台に登り始めたあたり)
- 42～5分:No.3 台地に登りきって斜度が緩くなった辺りで、不思議な路地を発見した
- 65～71分:No.3 台地から坂を下ったところにある谷戸斜面に位置する窪地 (No.1 谷戸窪地)に山の斜面を利用した公園を見つけ、公園の斜面を向こう側の台地 (No.4 台地)に再び登るまで
- 85分:No.4 台地から長い下り坂を下りて、再び台地 (No.5 台地-No.1 台地とは尾根続き)へと登り始めた途中の谷戸的窪地 (No.2 谷戸窪地)
- 105分:台地 (No.6 台地)から再び下り始めて急に出現した窪地的谷戸 (No.3 谷戸窪地)
- 111分:谷戸を通じて宮崎台の低地 (No.2 谷)に向けて下り始めている

いずれも坂を台地に向けて登る途中、もしくは台地から谷へ下る途中、そして、その中間に位置する特徴的な谷戸地形において、触覚的な気持ちが増減することが判明した。

【本電子教材の web アドレス】

[http://web.sfc.keio.ac.jp/~suwa/electronicmaterial/report2016/2016report\\_electronic.html](http://web.sfc.keio.ac.jp/~suwa/electronicmaterial/report2016/2016report_electronic.html)